

## 隅田川と江東地域 ③

## 『江戸名所図会』にみる隅田川

江東区深川江戸資料館

## 1. ナドコロから名所へ

名所とは、本来はナドコロと言  
い、歌枕として和歌に詠み込む土  
地のことでした。江戸周辺では、  
武蔵野や隅田川、待乳山まつちやまがありま  
した。江戸時代、人々の旅が一般  
的になると、名所は、名勝・寺社・  
史跡など、実際に訪ねて見るべき  
対象を指すようになります。そし  
て『江戸名所図会』のような観光  
案内・ガイドブックが次々と出版  
されました。

名所観の変遷に伴い、名所とし  
ての隅田川は、どのように理解さ  
れるようになったのでしょうか。『江  
戸名所図会』に記された隅田川を  
通して探って見たいと思います。



図 「正平七年隅田河合戦之図」『江戸名所図会』

## 2. 実態としての隅田川

江戸時代、「隅田川」の明確な定義はありませんが、概ね、千住大橋より下流、あるいはその一部を指して、「角田川」と書いたり「宮戸川」「浅草川」「大川」と呼んだりしていました。

中世までの隅田川流域は、浅草近辺を中心に江戸湊が形成され、水上交通の要衝として栄えていました。地理的には、武蔵国と下総国の境の川でした。因みに両国橋の名称は、武蔵国と下総国に架けられた橋であることからつけられています。また、様々な伝説の舞台となっており、東国の歌枕の地として知られていました。『伊勢物語』の東下りや『義経記』では、渡河の場面が印象的に描かれています。そして江戸時代、明暦の大火を期に東岸の開発が進むと、隅田川やその東岸も含めて、江戸の町として認識されるようになります。隅田川の周辺には寺社が配置され、隅田川と共に江戸近郊の名所として多くの人々が訪れるようになりました。

つまり江戸時代の隅田川は、境界、流通経路、ナドコロと名所などの認識が重なり合っていたと言えます。『江戸名所図会』はそのような時代に出版されました。

## 3. 『江戸名所図会』の編纂と隅田川

(1) 『江戸名所図会』とは

神田雉子町の名主、斎藤幸雄・幸孝・幸成げっしん（月岑）が親子3代、30年の歳月をかけて編纂し、天保7年（1836）、全7巻・20冊が刊行されました。江戸とその近郊についての名所案内記で、神社・仏閣といった名所古跡など1043箇所の沿革や由来、現状が述べてあり、江戸案内としては最も整ったものの一つです。

(2) 編纂方針

これ程の膨大な分量の名所を、どのような方法と目的で編纂したのでしょうか。亀田綾瀬かめだあやせの序文によると、斎藤幸雄は現地を歩く実地調査に加えて、文献資料をしやうりよう渉獵した上で、あらゆる事物や事象を書き記し、居ながらにして知ることのできるよう配慮していると述べています。そして、名所は発掘する人が現れてはじめてその価値を示す、と主張しています。名所をいかにに捉え、表現し、伝えようとしていたのかがわかります。

さらに、斎藤月岑は、凡例の中で「武蔵野、隅田川二所をもつて、第一の勝槩とす。ゆゑに隅田川をば、兩岸に分ちて、六、七の二巻に配せり」と述べており、隅田川を特別に意識した編纂姿勢がみてとれます。

巻	絵のタイトル	本文の小見出し		
六	(本尊縁起)	浅草川		
	(本尊縁起其二)			
	上流	千住川	熊野権現社 千住の大橋	
		光り茶臼 (六阿弥陀廻り)	甘露山延命寺 富士浅間祠 浅間の淵 十二天の森 余木の阿弥陀如来 石浜 石浜城址 橋場	
	西岸	石浜神明宮	朝日神明宮 真先稲荷明神社	
		思河・橋場渡	思川 隅田河渡 石浜古戦場	
		総泉寺・砂尾不動・同薬師	砂尾不動院	
		妙亀神社・浅茅が原・ 玉姫稲荷	妙亀山総泉寺 浅茅原 妙亀塚	
			法源寺・鐘が池	鏡が池 袈裟懸松 采女塚 東野先生之墓 婦命山法源寺
		角田河渡		
		正平七年隅田河合戦之図		
		正平七年隅田河合戦之図其二		
		(水鶏 橋場)		
		西岸	長昌寺宗論芝 今戸八幡宮 今戸焼	深栄山長昌寺 今戸八幡宮
	西岸		山谷堀・今戸橋・慶養寺 真土山聖天宮	霊亀山慶養寺 真土山 聖天宮 日本堤
		七	両岸	大川橋(吾妻橋)
	東岸		三囲稲荷社	三囲稲荷社
			牛御前宮・長命寺 (寺島)	牛御前王子権現社 宝寿山長命寺
			弘福禅寺 庵崎	牛頭山弘福禅寺
	東岸		請地 秋葉大権現宮・ 千代世稲荷社	秋葉大権現社
			寺島 太子堂・蓮花寺	清滝山蓮華寺
			白髭明神社	白髭明神社
	東岸		隅田川渡	隅田河
			隅田川堤春景	須田の河原 隅田河の堤 隅田の宿 都鳥
	東岸		木母寺・梅若塚・水神宮・ 若宮八幡 (内川・御前栽畑)	梅柳山木母寺 梅若丸の塚 内川 御前栽畑 丹頂の池 庵崎 関屋の里
			(梅若丸の説話)	
			両岸	鐘が淵・丹鳥の池・綾瀬川
上流其二			牛田 薬師堂・関屋里 関屋天満宮	牛田の薬師堂 若宮八幡宮

### (3) 隅田川の記述

左の表は、巻6、7の隅田川について記された箇所を、ほぼ本文の順番通りにまとめたものです。ここからわかることをいくつかあげてみます。

まず、巻6の巻頭に「浅草川」(隅田川下流)が登場し、浅草寺の本尊由来が記されていることに注目したいと思います。江戸幕府以前からの湊である浅草とともに取り上げるにより、隅田川を江戸の発展の中で位置づけようとする意図が感じられます。そして、巻7の「隅田河」の項目では、『万葉集』などの古典や言い伝えに寄りつつ、隅田川の水脈を推定しています。

全体の構成は、巻6は隅田川上流(千住)及び西岸(石浜から真土山まで)が、上流から下流の順に並んでいます。巻7は両岸(吾妻橋)、東岸(三囲稲荷社から木母寺まで)、上流(関屋の里や鐘ヶ淵)が、逆に下流から上流の順になっています。

巻6も7も、隅田川の範囲は吾妻橋より上流のみで、両国橋や新大橋、永代橋など河口部分は含まれていません。『江戸名所図会』において、隅田川の名所、名所としての隅田川は、浅草より上流、鐘ヶ淵までの流域に設定されていたようです。

内容は、絵も文も、隅田川両岸の寺院・神社が主役です。寺社の場所や、由来・沿革、本尊・宝物、さらには行事など、つまり名所としての見どころ紹介になります。隅田川が、その周辺の寺社と一体化して名所として意識され、描き出されていると言えるでしょう。

また、特徴的なのが隅田川にまつわる歴史・説話とその絵が挿入されていることです。例えば、巻6「正平七年隅田河合戦之図」(図)です。これは、他の説明的な記述と違い、読み手にタイムスリップさせるような効果をもたらしています。

### (4) 『江戸名所図会』の方法

以上、隅田川部分の特徴をあげてきました。そこには実地調査に基づく記述、文献や言い伝えを使っでの詳細な説明、歴史・説話を挿入させる仕掛けなど、歴史的・伝承的背景を踏まえつつ当時の感覚で名所を浮き彫りにするという緻密な手法をみることができます。

## 4. 名所の磁力

人々の注目を集めるような寺社や歴史的な事跡、景色である名所には、信仰や娯楽を求めて、多くの人々が集まってきました。また、それらにまつわる様々な物語も生まれました。名所には、独特の磁力のようなものが作用していたのです。『江戸名所図会』はそれらをうまく描き出した書物であると同時に、『江戸名所図会』などの名所案内記の普及自体も、名所の活性化に影響していたと言えます。